

成長・競争社会と〈居場所〉

問題提起

Introduction: The Concept of “A Place where One Belongs” in a Competitive Growth-driven Society

片山 善博

KATAYAMA, Yoshihiro

アベノミクスの掛け声の下、3年目を迎えた。円安の加速と株価の上昇で、大手メディアは、アベノミクスの意義を解説し、その政策に肯定的な評価を与え続けてきた。確かに、自動車などの輸出企業やグローバル企業にとっては、有利な政策である。しかし、貧富の格差は依然として広がり続けており、生活保護世帯も増え続けている。さらに、現政権は、アベノミクスを唱える一方で、憲法改正に向けた動きや集団的自衛権の容認など、戦後70年を迎えた日本のあり方を根底から変えようとしている。そしてこの政権を、2015年2月の時点で、約半数の国民が支持している。

アベノミクスは、おおざっぱに言えば生産性の向上が雇用環境を改善するという考え方を基調とする。企業が成長する、つまり生産性を向上させることで（その中には実は人件費の削減も含まれているのだが）、国際競争力をつけると、その結果として、その恩恵は一般の働き手にももたらされ、賃上げが起こるといふものである。また企業収益に連動した株価の上昇によって、さまざまなグローバル企業が日本市場に参入し、多くの資本が日本に集まり、日本は豊かになるというものである。しかしそのことは同時に生産性が低く競争力のない部門（たとえば農業など）を切り捨てることを意味する。国

際競争力を持たない（持つことができない）企業や人間は、このような成長と競争に彩られた社会の中で、淘汰され、排除され、弱者の位置におかれることになる。しかもこの成長・競争の考え方は、利潤を追求する企業以外にも、たとえば大学などの教育機関や医療機関、福祉施設など本来利潤の追求と無関係な分野にも及んでいる。

現政権（に限らず戦後のすべての政権）は、経済成長と競争力の強化が日本に繁栄をもたらすものと考えてきた。とくに1990年代以降のいわゆるアメリカン・スタンダードのグローバル化のもとで企業や国民には国際競争力が求められてきた。たとえば、企業や学校で英語（と言っても英文学のような教養としての英語ではなく、コミュニケーションツールとしての英語）が重視される。大学でも第二外国語が削減され、スキルとしての英語一辺倒になりつつある。小学校でも英語が科目に組み込まれた。このように、グローバル化が要求するのは、価値の多様性ではなく、ある種の価値観への同化である。経済であれば、株価などのお金で測ることのできる経済成長であり、国家であれば、グローバル化を補完するナショナリズムである（国益を守るという名目で、グローバル企業を優遇するために）。

しかしながら、18世紀、重商主義のイギリス

で、経済学者のA・スミスが探究したように、「国の繁栄とは何か」を、今一度考えなおす必要があるのではないか。経済成長や競争を通して貨幣や資本を獲得することは、今の日本にとってほかのすべてに優先させるだけの価値あるものなのか。金儲けのための成長や競争がなくとも、もっと豊かに幸福に生きていく道はあるのではないか。そもそも私たちは本当にそのような経済成長や競争を求めているのか。この20年余りの歴史が示しているように、このことがもたらしたものは一部の企業や人々へのお金の集中であり、それ以外の企業や人々との格差の拡大であり、貧困の増大ではないのか。そして3・11後の原発事故に端的に示されているように、豊かな自然とそこに生きる人々の結び付きの破壊ではなかったのか。

しかし、このような事態になっても、なぜ多くの国民は、金儲けのための成長や競争を推進する社会のあり方を容認しているのか。

私たちは、生活していくなかで、意識的・無意識的に社会の支配的な価値観に合わせている。それは、それとは異なる価値観をもつと社会から排除され、孤立することを無意識のレベルでも感じているからであると考えられる。私たちは、支配的な価値観に自らを同化している限りにおいて、排除されることはないし、それどころか強者の位置に立つこともできる。直接的には、高い賃金が得られ、生産・消費活動において自己を達成でき、社会的な承認を得られるのである。このことは、たとえば3・11以後の原発再稼働をめぐる学者や評論家たちの態度や発言を見ているとはっきりするだろう。もちろん、異論や反論を行う者もいるが、いつの間にかその多くが大手メディアから消えている。さらにより明確な異論を行う者に対しては、バッシングが繰り返さ

れることもある。

ここには、支配的な価値観への同化をめぐる〈承認と排除〉言い換えれば〈支配する者と支配される者〉の構造がある。私たちは、排除されないように、経済成長や競争を是とする考え方を自ら進んで承認し、それに同化しようとする。その結果、脱成長をとらえたり、金儲けなど二の次だという言説は排除されていく。この価値観に違和感をもつ者は、居心地の悪さを感じ続けるだけでなく、場合によっては物理的な意味での生活の場を失うことにもなる。別にお金がなくてもよいとか、経済成長のほかにもっと大切な生き方があるのではないかという価値観は、支配的な価値観に同化しようとする者たちによって、非現実的であると一蹴されてしまう。そして、そのもとで排除された者たちには、見かけ上は支配的な価値観と対立するが、実はそれを補完するものとして用意されたナショナリズムが押し付けられる。多様な人々の多様な生き方を奪う（一つの価値観に同化させる）ものとして。

成長・競争社会がもたらすものは貧富の無限の拡大であるという指摘は、すでに19世紀初めにヘーゲルによってなされている。私たちは、〈成長・競争〉をいったん括弧に入れて、あらためてこの間何が失われてきたのか、何を再生させるべきなのかを考えていく必要があるだろう。

日本には他の多くの国に比べて、豊かな自然がある。水資源も豊かであるし、森林や耕作に適した土地も多い。地方に行けば、どこにでも森林や農地を見出すことができる。私たちが生活できる場所はどこにでもあるはずである。しかし、労働人口の都市への流出によって、地方では、高齢化と、人口減が急速に進んでいる。そして農地だけでなく、長年培ってきた生活風習や文化も失われつつある。安心し

て暮らせる場そのものが失われつつあるのである。なぜなら、過疎化が進んでいる多くの地方は、成長・競争を優先する価値観からずれた所にあるからである。競争力のある企業もないし、仕事があったとしてもギリギリの生活を強いられる仕事である。とって、そこの人々が支配的な価値観に合わないことをはじめたら、国から適切な支援が受けられる可能性は低い。その結果、地方では、さらに若年層の流出が続き、競争力も落ち、疲弊していくという悪循環に陥っている。

都市でも事態は深刻である。人々は、さまざまな競争に耐えなければならない。雇用の流動化に伴う人件費の削減やグローバル人材（競争力を持った人材）養成の急速な推進は、人間的な限界（失業・非正規の増加、社会的排除、精神疾患・自殺の増加など）に達しているように思われる。このことは、学校の中での排除や選別、あるいは引きこもりなどの問題にまで広がっている。

また、こうした形での経済成長は、自然環境にも深刻な影響をもたらしている。1972年のローマクラブの報告にあるように、地球は資源だけでなく、生態系として限界に達している。東日本大震災をきっかけに起こった原発事故の問題は、自然環境に対しても多大な被害を与えた。経済成長の原動力にもなった原発が引き起こした事故は、私たちに、経済成長社会の推進ではなく、自然との共生を基礎に置いた別のライフスタイルや別の仕組み（相互扶助や分配や承認の仕組みなど）を構想するきっかけを与えることになった。

3・11の東日本大震災や原発事故は、人間の無力さの自覚とともに、そうした人間がどうしたら互いに支えあう仕組みを作り出せるのかという問題を、私たちに指し示したはずである。そして、支えあい

の中ではじめて人間は自立できるという意識をもたらしたはずである。自然的な条件に左右されながらも、その条件とうまく付き合いながら、自然が与えてくれた資源を大切に使い、さまざまな人間が互いに共存できる共同体を構築していくことが、現在の優先すべき私たちの課題ではないだろうか。その視点から、改めて成長・競争社会を捉え直さなければならぬ。

現在の成長・競争社会は、自然にとっても、人間にとっても、その成り立ちを崩壊させる地点まで来ているように思われる。人は、自然や他者との関係抜きに生きていくことはできない。とくに人は、他者との関係の中で、人間性や社会性を身につけて、つまり人間になっていく。その関係の具体的な場は、単なる場所ではなく、人と人が居合わせる精神的な〈居場所〉ということになる。人は一人では生きて生きない以上、その場において人が自分の弱さを自覚しながら、互いに支え合っていく。それは、どんなに脆弱なものであろうとも、人が落ちつくことのできる場、安心していられる場ということになる。もちろん生活空間も含まれるが、自尊感情や自己肯定感、安心感や帰属感などが持てる空間である。そうした場を一人ひとりがさまざまな仕方でもつことによって、人は安心して生きていけるのではないか。そしてこうした場が存在することが人に安寧を与えているのではないか。こうした〈居場所〉を、成長・競争社会は、生み出しているのか、壊しているのか。人は、成長・競争社会の中で、〈居場所〉をどのように作ることができるのか。

これまでみてきたところからも明らかなように、競争を強制される成長社会（そして成長を支えるための管理社会・監視社会）は人々が、先に述べた〈居場所〉を持つことを困難にしているのではない

かと、筆者は考えている。なぜなら、本来の〈居場所〉とは、一元的な価値のもとに成り立つ場ではなく、人間同士の共感や異質な存在の相互的な承認に基づく時間的な場であると考えからである。仮に一元的な価値のもとに成り立つものだとしたら、その価値に合わせていくしかなくなり、そこから外れないようにする、あるいは外れたらどうしようという常に不安と恐怖にさいなまれることになるかである。したがって、安心した〈居場所〉が生み出されるためには、支配的な価値観に対して価値観の多様性を認めていくことが必要であろうし、成長・競争以外の価値観を重視していくことが重要である。

人間は、どのような状況の下であろうとも、社会的存在として、何らかの形で自らの〈居場所〉を作り上げようとしてきた（たとえば若者のネット空間なども含めて）。しかし、〈居場所〉を奪っていく成長・競争社会においては、そうした場を意識的に作り上げていかなければならないだろう。

以下の論文では、成長・競争以外の価値に基づくさまざまな〈居場所〉をめぐる議論がなされるはずである。成長には成熟するという意味もある。人間の成熟をもたらす場としての〈居場所〉とは何か、という視点から、成長・競争社会のあり方を問い直すことができるのではないか。

片山 善博（日本福祉大学／哲学）